

石上神宮

天理市東部の郊外にあるこの木陰の小さな神社は、今日では歩き回る多数の鶏でよく知られているが、石上神宮の境内は質素であるが実際には奥深い歴史がある。日本最古の神社の一つである石上神宮は、その起源を歴史と伝説が交錯する中に遡ることができる。霊的な力の中心地として、また古代の遺物の保管場所として始まり、2000 年以上に渡って、皇室の長寿と国の繁栄を祈る年中行事である古代の祭礼、鎮魂祭（p.XX）の場であった。

石上神宮は紀元前 91 年頃、朝廷において軍人としてだけでなく祭事にも務めた物部氏によって創建された。神宮が建てられたのは初代天皇が振るったとされる神剣「二の御魂剣（ふつのみたまのつるぎ）」を納めるためであった。現在、石上神宮には、現在の朝鮮半島にあった

百濟王国（紀元前 18 年～紀元後 660 年）より伝来したとされる七支刀（しちしとう）

（p.XX）をはじめ、多くの神器が納められている。歴史を通じて、石上神宮は多くの貴重な宝物の管理者として、皇室に忠実に奉仕し続けてきた。